



TITLE:

緒言

AUTHOR(S):

竹本, 修三

CITATION:

竹本, 修三. 緒言. 京大地球物理学研究の百年 2010, 1: 1-1

ISSUE DATE:

2010-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169871>

RIGHT:

緒言

1909年9月に志田順（とし）が第三代京都帝国大学の菊池大麓総長に招かれ、同・理工科大学の助教授として地球物理学の研究を開始してから百年が経過した。これを機会に京都大学における地球物理学研究の百年の歴史を振り返ってみるのは有意義なことであるということで、関係各位のご協力を得て、2009年度に国際高等研究所フェロー研究会：「京大地球物理学研究の百年」を3回にわたって開催した。

本集録は、その研究会の講演録のまとめと、講演はしていただけなかったが、その後にいただいた「京大地球物理学研究の百年」関連の寄稿を集約したものである。また、歴史資料として、対談：「佐々憲三・三木晴男：一京大地震学史に関連して」と「京大地球物理学研究に関係した教員の在職期間一覧」も末尾に収録してある。

志田が京都に赴任した1909年前後の数年間にその後、「京都学派」と呼ばれる人脈の多くの源が形成されている。1908年に菊池大麓が第三代京都帝国大学総長に就任する2年前の1906年に京都帝国大学に文科大学が新設されたが、その初代学長に、東京大学理学部数学科で菊池の教え子であり、第一高等学校校長であった狩野亨吉が就任している。狩野は、文科大学学長に就任すると、学歴にとらわれずに個性豊かな人材を京都に招いたが、1906年には小説家の幸田露伴（国文学）、また、翌1907年には新聞記者の内藤湖南（虎次郎）（東洋史学）が、それぞれ、文科大学史学科の講師として着任している。幸田露伴は、文学者としての生活を続けるために、僅か一年足らずで大学を辞してしまっただが、内藤湖南は、1909年に講師から教授に昇進し、同僚の狩野直喜や桑原隲蔵らとともに「京都支那学」を創設し、京大の東洋史学研究の礎をつくった。なお、桑原隲蔵は、フランス文学・文化研究者の桑原武夫の父である。

このほか、1906年に朝永三十郎が文科大学哲学科の助教授（西洋哲学史）、1908年に小川琢治が同史学科の教授（人文地理学）として就任している。朝永三十郎は朝永振一郎の父であり、小川琢治は小川芳樹、貝塚茂樹、湯川秀樹、小川環樹の父としても知られている。朝永三十郎は、1913年に教授に昇任し、1931年3月の停年退官まで、おもにデカルト及びドイツ観念論の研究を行った。

農商務省地質調査所の技師であった小川琢治は、広島高等師範学校教授から1906年に文科大学教授になった内田銀蔵とともに、文科大学史学科の開設に参画し、1908年5月に史学科の教授（人文地理学）に就任した。漢籍にも造詣の深かった小川は、自然地理学のほか、中国の歴史地理学に関する優れた講義や論述を行ったという。1921年に理学部地質学鉱物学教室が創設されたのに伴い、小川は、同教室の主任教授として理学部に移った。

また、1907年に文科大学哲学科社会学講座の講師として、同志社普通学校教諭の米田庄太郎が登用され、1908年には上田敏が同文学科英語学英文学講座の教授として着任している。米田は、該博な知識と卓越した語学力を駆使して、海外最新の論著・学説の紹述批判を行い、わが国の社会学の発展に先導的役割を果たしたほか、日本最初の全国的な社会学会である「日本社会学院」の創設（大正2年）にも力を尽くした。上田は、号を柳村と称し、訳詩集『海潮音』のなかで、カール・ブッセの「山のあなたの空遠く幸（さひはひ）住むと人の言ふ」の「山のあなた」や、ポール・ヴェルレーヌの「秋の日のヴィオロンのためいきの身にしみてひたぶるにうら悲し」の「落葉」などの人口に膾炙している名訳で、今なお広く知られている。

このほか、1910年8月には、西田幾多郎が学習院教授から文科大学哲学科の助教授（論理学）に就任している。西田は、1913年8月に宗教学講座担当の教授になり、その翌年に哲学講座の桑木厳翼教授が東京帝国大学に転出した後を受けて、以後は哲学講座を担当した。

このような、「京都学派」の揺籃期の1909年に、志田順が菊池大麓の招きにより、第一高等学校教授から京都帝大理工科大学助教授に就任した。志田は、菊池の期待に立派に応えて、地球科学の分野で多くの業績を残したばかりでなく、別府の地球物理学研究施設、阿蘇の火山研究所や阿武山地震観測所を開設し、京都大学における地球物理学の研究基盤の礎を築いた。

その後、次第に大学の個性が失われていくなかで、地球物理学の分野において京都大学が果たした役割はどのようなものであったかを検証し、それを今後の京都大学における地球・惑星科学の発展につなげたいというのがわれわれの望みである。

（竹本 修三）